
コメディー工場

HEERO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コメディー工場

【Nコード】

N0904F

【作者名】

HERO

【あらすじ】

変な話を集めた短編集です。『短編の時間だよ（仮）』っていうタイトルを変更しました。

貧乏父娘（前書き）

貧乏な父と娘のコメディです。

貧乏父娘

郊外にひっそりと佇む木造一階建ての家。ほとんど廃墟と成り果てたその家屋に二人の父娘が暮らしていた。

「次の台風が峠……だな」

黒ずんだ畳に仰向けになり、父はぼそつと呟いた。峠というのはつまり、この家が次の台風で崩壊してしまうかもしれないということだろう。

「台風来るの！？ いつ！？」

娘が顔を綻ばせながら父の元へ寄ってきた。台風が子供心をくすぐるものであることは周知の事実である。

「来週頃とか電気屋のテレビで言ってたぞ」

この家にはテレビが無い。一応テレビ自体は存在するのだが、壊れてしまっているため、今は脚の無いちゃぶ台を下で支えることに従事している。

「父ちゃん、今年も板を貼るんだよね？ 無敵要塞モノリス！」

「ああ、やるぞ、無敵要塞モノリス」

この父娘が言っている無敵要塞モノリスとは、つまりあの、台風の際に板を家の窓とかに貼って補強する、あれのことである。

「楽しみだなー！」

はしゃぐ娘を見て、父は首を傾げた。

「お前は父さんと違ってあれだな……明るいな」

「きつと死んだ母ちゃんに似たんだよ！」

「母ちゃんも暗かったな」

台風の日が来た。

「来週に来るんじゃないの！？」

「台風が日本から離れるのが来週……だったかな？」

嵐の中で窓に板を打ち付ける父娘。台風が翌日に来ると思っていなかったので、補強がまだなのだ。

「危ないぞ。お前は家に入ってるんだ」

「でも父ちゃん……！」

「父ちゃんは大丈夫だ」

「いや、家に入れないよ……！」

ノブをガチャガチャ回しながら娘が喚く。

「どういうことだ……？」

「あつ！ 板が貼ってある！」

窓だけでなく、ドアにまで板が貼られていた。

「くっ……これでは中に入れない。嵐の中に閉じ込められてしまった」

面白い表現である。

「父ちゃん……」

「気にするな、父ちゃんは別に怒ってないぞ」

「そりゃ、ドアに板貼ったのは父ちゃんだし……」

「そ、そうだったのか……」

「父ちゃん、ここにいたら危ないよ。お店とかに避難しなきゃ……」

「こんな状況じゃ、たいていの店は休みだな」

瓦も剥がれる程の強風の中、二人は寄り添うようにしてしゃがみ込んでしまった。

「父ちゃん、釘抜き無いの？」

「丸岡さん家の窓が割れてるだろ？ あれは父ちゃんの持ってた

釘抜きが飛んでって割れたんだ」

「ええ！？ じゃあ……ドアを壊そう。このまま外にいたら危ないよ……」

「なるほど、名案だな。命を繋ぐためならドアの一枚くらいどうということはない」

そう言つと父は立ち上がった。

「蹴破るぞ」

「頑張つて、父ちゃん！」
「そらっ」

父の前蹴りがドアの中央を捉えた。
激しい音と共に、

「父ちゃん…！」

ドアが、

「ああ…！」

勢いよく、

「どうするの！？」

大胆に、

「すまない…」

家と共に倒れた。

次の日。

「何とかしのげたな…」

縁の下から父と娘が姿を現した。

「床が残つててよかったね」

「ああ…」

いつも以上に暗い面持ちの父。

「どうしたの父ちゃん？」

「いや、なんだかな……お前にはいつも大変な思いをさせて……」

俺は全然父親らしいことを……」

「はいはい、湿っぽい話はなしだよ！ 家を直さなくちゃ！」

娘は散らばった木材を集め始めた。

「ふ……うふふ……」

「どうしたんだ？」

「台風すつごく楽しかった！ 家も倒れちゃったし！」

「え…？」

「でも一番楽しかったのは、縁の下で父ちゃんとくっついて寝て

る時！ 水が流れてくるから下に板引いてさ！ きつとあんなこと
誰もやったことないよね！」

「こんな時でも笑顔で…。お前は強い子だな…」

「ううん、父ちゃんが強いから私は笑ってられるんだよ。ありが
とう、父ちゃん」

そいうと娘は父に背を向け、木材集めを再開した。

「俺が…強いかな。だとしたらそれは、お前の笑顔のおかげだよ…。
こちらこそ、ありがとうな」

父は優しい笑みを浮かべた。

貧乏父娘（後書き）

「無理矢理いい話にしようとするな〜！」という声が聞こえてきそうなラストでした；

私と死神さん

「あの葉っぱが全部落ちたら死ぬのかな…私」

最近の私はもっぱら、病室のベッドで上半身を起こしたまま窓の外に生えている大きな木を眺め続けている。

私は不治の病におかされた余命僅かの憐れな美少女なのだ（すみません、美少女は嘘です。実はそんなたいしたことないんです）。

「ちくしょう……一度も彼氏できんまま死ぬのかよ……。もっと長生きしたい……。死にたくないよ……」

涙で歪む視界。外の木がうねうねと踊っている。

「…あれ？」

ふと涙で潤む不明瞭な視界の一部に何かおかしなものが写った。

木の枝に…誰がいる…。

私は涙を袖で拭い、もう一度窓の外へと目を戻した。

いない…。気のせいだったのだろうか？

「俺を探してんのか？」

「えっ！？」

その声は窓の反対側からした。私はすぐさま首を百八十度反転させる。

「だ、誰！？」

ベッドの横に見知らぬ男性が立っていた。その身なりは実に滑稽で、ボロボロの黒い布を全身に纏い、背中には大きな鎌を背負っている。もしかしたらコスプレというやつなのかもしれないが、彼の顔は非常によく整っているため、「うわっ、オタクかい！！よせっ！近づくな無礼者！」という感じは全然しない。むしろ見方次第ではビジュアル系ロックバンドで通用するかもしれない。

「俺が誰かって…？」

そう言くと男性は何故か床に膝をつき、頭を抱えだした。

「なんか死神らしいんだよ……。俺」

「はい…？」

馬鹿な私にはこの人の言っていることがさっぱり分らない。

「死神って…一体どういう……」

「死神知らんのか？」

「いえ、死神は知ってますよ。でもそんなの本当にいるわけないじゃないですか」

「あつ、マジ？　死神ってまさかUMA的な存在なんかな。河童みたく」

「ど、どうなんでしよう…」

からかわれてる…。私は今、からかわれてる…。死神なんているわけないし、いたとしてもこんな『ちゃらい』わけがない。

「あの…じゃあ死神だという証拠を見せてください」

「証拠か、オッケ。じゃあ外にあるあの木に一瞬で移動してやるよ」

その言葉の直後、男性は黒い煙を残して姿を消した。

「き、消えた！」

私はすぐさま窓の方へと首を向けた。

「えっ！　うそ！」

男性は本当に一瞬で外の木の枝へ移動していた。ただ…

「ちよっ、やべっ！　しくった！　ピンチ！　うおお！　シャレになんねーぞコレ！！」

枝にぶら下がる状態になっており、今にも力尽きそうだ。この二階の病室と同じくらいの高さに位置する枝なので、もし落ちたら単なる怪我では済まされない。

「こ…これまで……か……うわあああああ……！！」

「落ちた！！」

「どうだ、これで分かっただろ？　『はい』と言え、酷い目にあったんだぞ」

男性は血だらけの状態で、帰りは病院の階段を使って私の元に戻ってきた。

「は、はい…。実際に目の前で瞬間移動を見せられましたし、信じないわけにはいきませんよ」

怪我したのはたぶん私のせいなので、そういう意味でも信じないわけにはいかない。

「あの、死神ということは……やっぱり私の魂を狙ってきたんですか？」

「まあな。めんどくせーけど、それが俺に与えられた仕事だ」

「そんな……私、もつと生きたいのに……」

「生きたい……か」

死神さんは私のベッドに腰掛けた。

「死ねるなんていいじゃねーか。俺なんか死なねえから永遠に死神やってなきゃいけないんだぜ？ マジ最悪だつて。もう飽きたっつーの！」

「永遠……？ じゃあ死神さんはもう何千、何万年も死神をやっているの？」

「いや、俺が生み出されたのは先週の金曜。お前が初仕事」

飽きるのはえーな。

「でもよ、これから先ずつと生き続けなきゃならねーと思うと、もう今から滅入ってくんだよな」

そういうものなんだ……。永遠の命……私は普通に羨ましいと思うけど……。

「さてと、そろそろ始めるか。いや、終わりにする……ってのが正しいか？」

死神さんはボクシングのフォームをとった。

「なっ、どうするつもりですか……？」

「き、決まってるだろ……。お前を殺すんだ……」

素手かよ！？

「背中の鎌を使っんじゃないんですか？」

「こ、こんな物使ったら死んじゃうだろ…」

殺すんでしょ!?

「もしかして死神さん……恐いの?」

私が問い掛けると、死神さんは黙り込んでしまった。

「そりゃ……恐いさ。だって殺人だぜ? お前は平気なのかよ?」

「いえ……無理です……」

これが死神と人間のやり取りか?

「俺、やっぱ向いてねーんだよ……死神。どうにかして死ねねーかな……。このままじゃ永遠の地獄だ……」

「死神さん……」

何だか苦しい。彼の苦しむ姿を見ていると私まで辛くなってくる。

「そ、そうだ死神さん……」

「何だ?」

「私を殺さないっていうのはどうですか?」

「は? どーゆーこと?」

「死神さんが私を殺さなかったら、死神さんは仕事に失敗したことになるわけだから、懲戒免職とかになるんじゃないかと思うんです。死神の仕事さえなければ、ずっと生き続けるのも悪くないんじゃないですか?」

「なるほど、いい考えだな……。でも俺はずっと生きるのも嫌だ」
そう言いながら死神さんは懷から一冊の本を取り出した。

「この『死神規則』で殺しに失敗した場合の処罰を調べてみるかできれば処刑がいいんだけどな……」

「処刑って……そんな! 死ぬなんて駄目です!! 困ります!」

私はベッドから起き上がると死神さんに詰め寄った。ところが、
「キャッ!」

急に立ち上がったことで立ちくらみが起こり、私は死神さんに向かい前のめりになってしまう。

「うおっ!」

私はそのまま死神さんを押し倒してしまった。

「し、死神さん…受け止めてくれないんですか……」

「いや、無理だって…。俺さっき木から落ちて、あばら二十四本
いつちまってるんだ…」

全部じゃん。

「ところでさ…」

「はい？」

「さっき俺が死んだら困るって……」

「えっ！？ あのだ…それは……」

「たぶん俺もだ…」

「え？」

「なんかだんだんお前に死んでほしくなくなってきた。つか、
一目見たときからちよつといいな〜とか思ってたし」

死神さんは私の体を抱き寄せた。

「死神さん…！？」

「俺はお前を殺さない。処罰を受けて死神の運命から解放された
いとか、そういうんじゃない。純粹に、殺したくないんだ」

私と死神さんは立ち上がり、向かい合った。

「俺はもう行く。お前の目の前で死ぬわけにはいかないからな」

「そんな、まだ死ぬって決まったわけじゃ…。死神規則を読んで
みましょうよ」

「もう読んだ…」

「えっ！？」

まさか、じゃあ……殺しに失敗したら処刑されちゃうってこと？
そんな……。

「でも何が書いてあるかは分からなかった」

「えっ！？ どういうことですか！？」

「新人死神説明会の日に暇潰しで描いた落書きのせいで、肝心の
『仕事を果たせなかった場合のペナルティー』の欄がグチャグチャ
で見えないんだよ。ほら」

「うわっ！」

死神さんが私に見せたページにはびっしりとダンゴムシの裏側が描かれていた。気持ち悪い。

「何やってるんですか！？ 何でよりによってダンゴムシの裏を……。しかも無駄に上手いし……」

「まあとにかく、これで俺がどうなってしまうのかは分からない」
死神さんは窓を開けた。

「どこへ……！？」

「誰もいない場所へ行く。俺が死んだとしても、誰にも迷惑のからない場所へ」

「死神さん……」

「じゃあなっ……て、うおー！」

「キヤア！」

窓の縁に乗せていた足を滑らせ、死神さんは二階の窓から落ちた。

「死神さん！」

窓から下を見下ろすと、落下した死神さんの周りに早くも人だかりができている。

「キヤアアア！ 人が落ちてきたわ！」

「誰か医者呼んでこい……！」

早くも大迷惑……！

ところが死神さんはすぐに立ち上がると、集まってきた人達を掻き分けてどこかしらへと消えてしまった。

「行っちゃった……。私、助かったんだ……。でも、もう死神さんには会えないんだよね……」

死神さん……。私も一目見た時から……。

それから半年が経った。

「おまたせ西上君！ 待った？」

「いや、俺も今来たところ」

治る見込みのなかった病気を乗り越え、ついに私にもこうして彼氏ができた。

「まずはメシ行くか」

「うん！」

私と西上君はゆっくりと歩き始める。

「俺さあ」

「なに？」

「お前と永遠に生きてたい」

「うわっ！ また恥ずかしげもなくそんなことを！」

でも、嬉しい…。なんかもういつ死んでもいいや。あれ？ いつ死んでもいいって…せつかく病氣治ったのに何言ってるんだろ私…。

「永遠に生きてたい…か。まさか俺の口からそんな言葉が出るとはな…」

私と西上君は同時に苦笑いをした。

「私、西上君が人間になれて本当によかったと思ってる」

「ああ、俺も人間になれるとは思ってなかった。まさか『一度でも仕事を果たせなかったら二度と死神界には戻れず、人間として限りある時間を生きる』なんてのが罰だとはな。他の死神には辛いことなんだろうが、俺にとっちゃ願ったり叶ったりの結果だな」

「素敵な彼女もできたしね」

「自分で言うなよ」

残りわずかだった時間が数十年も延びた私。

そして永遠だった時間がたった数十年に縮まった死神さん。

そして得られた、お互いという存在。

「またいつか…私…ていうか私達の前に死神が現れる時がくるんだよね……」

私がそう呟くと、西上君は鼻で笑った。

「そんなときや二人でボコッてぶっ倒しやいいんだよ。時間もった

いねーし、あんま暗いこと考えんな」

「うん、そうだね」

命には限りがある。でも私には一人でいることが永遠のように感じられる。

いや、きっと本当に永遠なんだ…。

「あゝ、なんか浮気してゝな」

「おおおおおおおおおい！！！！」

私と死神さん（後書き）

なんかテーマとか色々あったような気がするんですが、特に考えもまとまらないまま書きだしたためにギャグが弱いし山場もないし、ちよつとよー分からんくなりました。そのうちたっぷり書き直しを…。

一目惚れはさせたくなかったんですが、短編なのでじっくり好きになる時間がなかったんです；

妄想ドーター・クリ子（前書き）

子供大好き男の喜びと苦悩を、誰にも伝わらないように描きました。
伝わるようには描きませんでした。ノンフィクション。

妄想ドーター・クリ子

「は…離せええ!」

「何故だ!? 本当は嬉しいんだろ!? 俺の愛に満ちた抱擁、『ラブ・ホールド』に至福を感じておるのだろ!？」

もうすぐ中学生になる弟の身体に兄貴が抱き着いた。兄貴は弟が幼い頃から溺愛し続けているのだ。

「ていつ!」

「うぐっ…!!」

掛け声と共に、弟は力任せに兄貴の束縛から逃れた。

(こいつ…いつの間にこのような大いなる力を…!!?)
日々運動で身体を鍛えている弟。不思議なほど貧弱な兄貴はもうその力を抑え切れなくなっていた。

弟に拒絶された兄貴はショックから自分の部屋に閉じこもってしまった。

「ムキー!! 愚かなる弟め! 自分一人で大きくなったと思いやがってからにいい!! 『兄の心弟知らず』とはこのことよのう!!」

語呂が悪いぞ、兄貴よ。

「こうなったら日課である『変態小説』で気分をハッスルさせてやるぞい!!」

兄貴は生意気にもネット上で小説を連載している。『兄が妹にセクハラをしながら大冒険を繰り広げる』というよく分らん小説だ。

「ああ…いいなあ…子供…かわいいなあ…。おいどんこんなかわいい妹が欲しかばい」

兄貴は自分の書いた小説を読み直しながら溜息をついた。

「くうう…マジで子供欲しい…今すぐ手に入れる方法ないか

なあ……」

あるわけないだろ。

「誘拐……か……」

誰かこいつを止める！

「はあ…ちっちゃい子つて、ほっぺがぷにぷにしてて超絶プリチーなんだよなあ…！！ ウンコって言うだけで笑ってくれるし！！」
毛布を抱きしめながらベッドでのたうちまわる兄貴。

「そうだ！ 想像で子供を作ってみよう。俺の心の中で俺好みに成長していく最高の子供を！」

兄貴はベッドであぐらをかき、軽く目を閉じた。

（初期設定は…そうだなあ……四歳の女の子にしよう。名前はクリ子。目がクリクリしてて、ほっぺもぷにぷにしてて、顔を近づけるとチュウチュウしてくれる天使のような子！）

兄貴は緩んだ口元から一筋のよだれを垂らした。

「うわあああ！！ 超級かわいい！！」

上手くイメージが固まったのだろう。兄貴は歓喜のあまり声を上げた。

「ク…クリちゃん……ハア…ハア……ゲッフエッフエ……パパと……お風呂入るかい……？」

鼻息を荒くし、妄想の娘に話し掛ける兄貴。

「えっ！？ パパとは入りたくない！？ パパの後に入るのも嫌！？ ショック！ でも嫌いじゃないよん、こういうシチュ！」

どうでもいいが、四歳がそこまで言うだろうか？

「ところでクリちゃんさあ……好きな男とかいるん？ い、いるわけないよね！ まだ四歳だし……えっ！？ いる…！？ 誰なの！？ なぬう！？ あの悪評名高い糞ガキ、首領^{ドン}グリ男のことが好きなのか！？ よせっ！！ 駄目だ！！ あいつはろくな奴じゃない！！ はっ！？ もうこまでいった…！？ ジーザスクライスト……！！」

拳を振り上げそう叫んだ直後、兄貴はあることに気がついた。

（み…見られ……てた？）

ドアが数センチ開いており、隙間から母親が覗いている。

「ニ…ニ…ハオ！　マイ、ビューティフルマザー！」

もはやそんな挨拶でごまかしきれぬ状況ではない。

後日、兄貴は脳外科へと連れて行かれた。

孫がほしくて

「誘拐してしまったのう、ばあさんや」

「誘拐してしまいましたねえ、おじいさん」

小さな子供を前にし、爺さんと婆さんは顔に笑みを浮かべた。

「悪いのはあの馬鹿息子じゃ。わしらに孫の顔をろくに見せんま
ま、海外なんぞへ移住なんてしおったからのう」

「その通りですよ、おじいさん」

いや、誘拐の方が悪い。

「それにしても上手くいったのう、ばあさんや」

「そうですねえ、おじいさん」

「保育園で『迎えに来た』と言っただけで、『どの子ですか？』
と言つて好きな子を選ばせてもらえるとは、世の中捨てたもんじゃ
ないのう」

「より取り見取りでしたねえ、おじいさん」

「老人だと思って油断したんじやろうな」

「駄目な保育園ですねえ、おじいさん」

その場合駄目なのは保育園じゃなく、お前達の人間性だろう。

「さあ、この子におやつをやるう、ばあさんや」

「せんべいでいいかしらねえ、おじいさん」

「固過ぎるじやろ。まだこの子には歯が無いんじゃないか？」

保育園児なめんな。

「それ、高い高いをしてやるう」

「気をつけてくださいねえ、おじいさん」

おやつはどうした？

「それい！」

爺さんは高い高いをやり始めた。

「ほれ、喜んどる！」

喜んでない。

「ほれ、よく見てみい！ 喜んどる！ 喜んどるぞ！」
喜んでない。

「さて、次は何をしてやろうかのう」
おやつを出せ。

「そうじゃ、高い高いをしてやろうかのう」
爺さん、痴呆？

「あらあら、まだおやつをあげてませんよお、おじいさん」
ナイス婆さん。

「じゃ、じゃが、まずは高い高いじゃ！ ハア…ハア…！」
爺さん、中毒？

「高い高いばかりじゃなくて、お馬さんなんてどうですかねえ、
おじいさん」

婆さんとはかくおやつを持ってこい。

「お馬さん？ 婆さんや、わしとお馬さんの因縁を忘れたのかの
？」

「あらま、そうでしたわねえ、おじいさん」
気になるわ。

「おお、婆さんや、そろそろ…」

「そうですねえ、おじいさん」

やっとおやつかい。

「散歩の時間じゃ」

「行きましようかあ、おじいさん」

「ちよちよちよちよ、待てやおい！！」

僕は叫んだ。

「あんたら何なん！？ つーか、おやつは！？ 何でさっさと出
さない！？ そもそも誘拐って設定がわけ分からん！！ そんな
だから孫に合わせてもらえんのやろがい！！」

爺さん婆さんは怯んだ様子で僕から離れた。

「す、すまんのう…。初めての孫についてはしゃいでもうて…。
誘拐の芝居をしたのは、さらった子供ほど可愛いという古人の教え

に従ったからなんじゃ」

「物知りですねえ、おじいさん」

生まれて五年の僕でも分かる。そんな教えは絶対に無い。

だが、老夫婦から滲み出るはかなげな風情。それを目の当たりにした僕の口からは、もう文句の言葉などは出てこなかった。

「分かったよ爺さん、婆さん、こつちもプロだ。好きにしてくれ」
そう、僕はプロ。レンタルファミリーとしてこの家に派遣されてきたのだ。

癖のある依頼主が多くて苦労はするけど、これほどやり甲斐のある仕事は他にない。

もっとも大切なもの、それを埋めてやるのがこの仕事なのだから。

孫がほしくて（後書き）

こついう仕事は本当にあるみたいですね。

ギャグ小説家になろう（前書き）

お茶漬けのようにサラサラと書きました。

ギャグ小説家になろう

小説とギャグ漫画を読むのが大好きな少年、シヨウ。彼は幼なじみの少女、セツコを公園に呼び出し、ある相談を持ち掛けた。

「抱かせてくれないか!!」

「はああ!!?」

セツコはたまたま持っていた砲丸でシヨウの頭部を殴り付けた。

「じよ、冗談だよ…」

ドクドクピュワームと血を流しながらシヨウが立ち上がる。

「実は僕、小説を書こうと思ってるんだ」

「あんたが小説を? プロを目指すの?」

シヨウは頭を振った。

「プロとかそんなじゃなくて、もつと気軽に小説サイトとかで公開しようと思ってる。でもまあ、やるからには頂点を目指したいな」

「へえ、やればいいじゃない。完成したら読んであげる」

「いや、『読んであげる』じゃなくて、セツコにも少し協力してもらいたいんだ」

「え!? 私が!?!」

「僕、物語なんて一度も書いたことないからどんなのがウケるのか分からないんだよ。粗筋程度でいいから一緒に考えてくれないか?」

「まあ、いいけど…」

躊躇うような口ぶりではあるが、セツコの顔は少し楽しそうだった。

「さて、まずは主人公から考えようか」

「いきなり主人公から? テーマとかじゃないの?」

「テーマなんて後付けでいいよ」

中身の無い作品になりそうである。

「僕が描きたいのはコメディーなんだ。コメディーはどちらかというと漫画寄りのジャンルだと僕は思う。だから普通の小説みたいになんかちりテーマなんて決める必要はナッシング！」

「でも、ちゃんとテーマを決めなきゃまとまりが無くなっちゃうんじゃない？ 不条理ギャグにするならいいんだろうけど、あまり万人ウケはしなさそう」

「青い、青いぞセツコ…！ ある漫画家さんの著書に、『話はまとまっているがギャグが面白くない漫画』と『話はまとまっているが一つ一つのギャグが面白い漫画』のどちらがいいかっていう話が出ていたが、答えは余裕で後者の方だった！ つまりコメディーなんてもんは笑えりやそれでいいんだよ！ それが全てなんだよ！」興奮したシヨウはセツコを押し倒した。セツコはたまたま持っていたメリケンサックでシヨウのこめかみを殴り付けた。

「まあ、ある程度はまとまりも意識するよ…ヒュウ…。僕も不条理ネタは好きじゃない…ヒュウ…」

こめかみを押さえながら立ち上がるシヨウ。息遣いがギリギリな上、顔から変な汗が噴き出している。

「さあ、話を戻そうか。主人公をどうするか」

「うーん、やっぱり主人公は何か特別な能力があった方がいいよね。何かの達人とかよくない？」

「達人…かあ。達人と聞いて最初に思い付くのは武道とか…」

「あつ、じゃあ武道じゃなくて葡萄の達人にしてみたら！？ 武道の達人かと思いきや、葡萄栽培の達人だった、みたいな！ アハハ！」

「笑えない」

セツコはたまたま靴の踵に付いていた拍車でシヨウを蹴りあげた。「ぐうう…ご、ごめん…言い方が悪かった…。でももうちょつと意外性のある達人にしようか…。例えばそうだなあ…昨今の

日本が失ってしまった、『古きよき時代を彷彿とさせる達人』……とか？」

「古きよき時代……？ うゝん、何だろ……」

「まあいいか、臆けながら形は見えてきたし、主人公はいったん保留にしよう」

主人公は後回しとなった。

「残りの登場人物はどうするの？」

「脇役は男ウケするように女の子を信じられないくらいたくさん出そうと思うんだ」

「えっと、一番男ウケしやすいのは……女子高生かな？」

「女子高生か……うん、いいかも」

「ほんと！？ あとさ、みんな何か悩みを抱えてる方がいいんじゃない？ それがキャラの魅力に繋がると思うんだけど」

「確かに。そして彼女達の悩みは全て主人公と関係しているんだ。そうすれば複雑な人間関係を描く事ができる」

「おゝ！」

話がずいぶん軌道に乗ってきた。

「よし、次は舞台だ」

「悩みを抱えた女子高生がたくさん出てくるのなら都会が一番合ってると思う。東京とか」

セツコはもつともな意見を口にした。しかしショウは納得のいかない様子。

「いやゝ、それじゃありきたりかな。コメディだからね、もつと奇抜でいいと思うよ。高ゝい所を舞台にしよう」

「東京より高い所？ 青森とか北海道？」

「いや、そういう意味じゃなくてさ……」

ではどういう意味なのだろうか？

「そうだ、主人公の性格をまだ決めてなかった。これが話の流れを大きく左右するんだよ」

話は再び主人公へ。

「主人公は男なんですよ？ やっぱ男らしい方がいいな。ちょっと悪そうな感じで」

「男らしい…と聞いて僕が最初に思い付くのは、『勢いのある食事の取り方』かな。悪い…といえばやはり『破壊的な行動』。そうだ、この二つの要素を同時に使ってみたら、かつてないほど凄い主人公が生まれるかもしれない！」

「そんな事できるの？」

「何だって出来てしまうのが小説…いや、コメディーなんだ！ ショウは突然セツコに背を向け走りだした。

「ありがとう！ 何だか凄い小説が描けそうだよ！！」

ショウは嬉しそうにそう言い残し、セツコの視界から消えていった。

三日後。

「小説が完成したって聞いたけど、処女作だしあまり期待し過ぎない方がいいかな」

セツコはパソコンを立ち上げ、小説サイトにアクセスし、完成したというショウの作品を検索した。

「出た出た。タイトルは…『ダーティーヒーロー物語』伝説の超凄い奴〜！？ アハハッ！ センスないにも程があるって！ あっ、笑っちゃった…。そっか、この馬鹿らしくも一見本気に見えるてしまうようなタイトルは、笑いを誘うための…」

セツコはタイトルをクリックし、小説の入口のページへやってきた。

「あつ、イラストがある！ 『HEROさんから頂きました』…。へえ、誰かに頼んで描いてもらってもいいんだ。でも汚いイラストね…。普通人に渡すなら着色くらいするでしょ…。駄目ねこのHEROって人。どうせ書いてる小説も変なのばっかなんだろうな」

セツコは『小説を読む』と書かれたアイコンをクリックした。

「目次ページね…。あつ、粗筋が載ってる」

目次ページの一番上には粗筋が表示されていた。

「粗筋を読んで面白くなさそうだったら、今日は疲れてるし読むのやめようかな…」

そう言いながら粗筋に目を通すセツコ。

「ん！？ こ、これは！！？」

『コマ回しの達人が孕ませてしまった女子高生100人と宇宙へ旅立ち星々をサラサラとお茶漬けのように腹へ流し込む痛快ドラマタスペクタクルファンタスティックラブコメディー巨編！！』

「ヤバイ！！ 超面白そう！！！」

ギャグ小説家になろう（後書き）

そのうち、コメディ―小説家の喜びと苦悩を描いた連載作品とか書きたいです。

今回のような投げやりなものじゃなく…。

ハム男（前書き）

僕の日常をほんの少しだけお見せするハム！

ハム男

やあみんな！ 僕の名前は『ハム男』ハム！ 独身OLに飼われているジャンガリアンハムスターハム！

「ハム男、ただいまー！」

御主人様が帰ってきたハム！

「ハム男、今日は一日何してたの？」

『今日も車輪を回すだけの一日だったハムー！！』

「うふふ、楽しい一日だったのね」

んなこと言つたらんハム！

「ほらハム男、ヒマワリの種だよ」

おお、餌ハム！ 御主人様が餌をくれたハム！

「ハム男が一番好きな食べ物はない？ やっぱこのヒマワリの種かな？」

『普通にエビチリが好きハムー！！』

「やっぱりヒマワリの種だね」

人間はみんな勘違いしてるハムが、ハムスターは全員中華が好きハム！ 中華を食べれば本当は五十年くらい生きられるハム！

「あつ！ 今流れ星が見えた！ ハム男も窓の外見てたよね？ 何かお願いごとした？」

『人間になって御主人様を犯してやりたいハムっ!!』

「うふふ、叶うといいわね!」

まったくだハム!

「『ヒマワリの種をお腹いっぱい食べる』お願いなんていかにもハム男らしい」

わかつとらんじゃないハムか! ヒマワリの種じゃなくてあんたを食べるお願いをしたハム!

「ハム男…これからもずっと一緒だよ。これから先も、ずっと私の友達でいてね…」

そうしたいのもやまやまハムが、

『どうせあと一年くらいしか生きられないハムっ!!』

ハム男（後書き）

昔、ブルーサファイア（だったかな……）っていう種類のハムスターを飼ってました。

すっごくかわいかった……それなのに……ああ……召されました。

ロボ子（前書き）

07年7月24日に連載小説の第一話として作成された『ロボ子』。
結局一話以降作られることはなく、執筆途中小説として眠っていました。

ロボ子

僕は御餅工業大学の一年生、『市川恭介』。

僕はやった…！ やったんだ…！

高校の頃から諦めずに作り続けてきた一体のロボットが、遂に完成したのだ！

完成したロボットの名前は『ロボ子』。

何重にも捻って考えたので分かりにくいかもしれないが、『女の子型』と『ロボット』という二つの要素を組合せる事により、『ロボ子』という名前が生まれたのだ。

一応、脳内設定では女子高生という事になっているので、東〇ハンスで買ってきたコスプレ用の制服を着せてある。

ちなみに僕が制服を買いにいった時に店員をしていた女の子は、常に苦笑いで対応してくれた。

「よし！ それでは、スイッチを入れさせていただきます！」

僕は勢い良く、ロボ子の背中に付いているスイッチをONにした。

キユイイイイイイイン……

「おはようございます、マスター。」

ロボ子が挨拶をした！ 夢にまで見たこのシチュエーション！
僕の心に感動のハリケーンが吹き荒れる！

「マスター、私の名前は？」

「お前の名前はロボ子だ！」

「『鉄腕ロボ子』ですか？」

「え？ いや、『ただのロボ子』だけど……。」

「そうですか……。」

キユウウウウウウウ……

「こらこら！ 何でシャットダウンする！？」

僕はもう一度スイッチを入れた。

「おはようございます、マスター。」

「おはよう……。あのさあ、何でお前『鉄腕』にこだわるわけ？」

「マスターは何も分かっておられないのですね……。『鉄腕』というのは、ロボット界で最も気高い称号なのですよ？ もう少し詳しく説明致しますと、『漫画の神様』と呼ばれる……。」

さっき電源を入れたばかりだというのに、ロボ子はペラペラと喋りだした。

「な……なあ、何でお前はそんな色々知ってるんだ？ まだ俺はお前に何も教えてないぞ……。」

「いえ……この広い世界からすれば、私の知っていることなど、微々たるもの。これからマスターに多くの事を教えていただきます。」

「いや、そういう問題ではない気が……。」

「あつ……。」

ロボ子が無言に気付いたような声をあげ、おもむろに自分の胸を掴みだした。

「何してるんだ？」

「マスター……私は女として作られたのですね？」

「あ……ああ、そうだよ。お前は女子高生型ロボットなんだ。」

ロボ子が人工筋肉を歪ませて、明らかに嫌そうな顔をした。

「私はてつきり高い志を持った優秀な化学者の元に誕生したと思
っていたのにあるうことか童貞オタクの慰みものとして生を……」

「スイツチ、オオオオオオオオフ！！！」

今日僕は、人生最大の喜びと、人生最大の屈辱を味わった。

人の心を平気で半殺しにするロボット、『ロボ子』。彼女はある
意味、『ロボット三原則』を犯しているのでは？ と、僕は思う…
…。

ロボ子（後書き）

ロボ子はインターネットに接続できるので何でも知ってます。
あと武器はドリルです。

主の事を第一に考えるようプログラムされているので、主の言うことには何でも従うと思われがちですが、「私が身の回りのことを全部やってしまつてはマスターが人として駄目になってしまう」という考えを持っているので、基本何もしません。邪魔なだけです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0904f/>

コメディー工場

2011年10月3日19時58分発行